

●授業の目的

言語の意味論、真理論は、現代哲学の中心テーマの一つであり、それについての基本的な知見を提供し、基本的な問題について共に考えることを目的とする。

●講義内容

昨年講義した問答の観点からみた哲学的意味論を復習し、「同一性言明」の意味論、「言語によって対象を指示するとはどういうことか」、「意味の全体論」、「真理とは何か」などの問題を考えたい。

●授業計画

- 1、問答の観点から従来の「哲学的意味論」を復習する。
- 2、問答の観点から「同一性言明」の意味について考察する。
- 3、問答の観点から「対象の指示」および存在論について分析する。
- 4、問答の観点から「意味の全体論」および真理論について考察する。

教科書は使わない。適宜、授業時にプリントを配付し、HPにupする。

参考文献は、授業中に紹介する。

評価方法：毎回の出席とミニレポート50点、最終レポート50点

オフィスアワー：金曜午後3時～4時

一昨年度と昨年度の講義ノート「入江幸男のホームページ」にupしているので、授業に合わせて少しずつあらかじめ読んでおいてください。

参考文献：ライカン『言語哲学 入門から中級まで』勁草書房

野本和幸、山田友幸編著『言語哲学を学ぶ人のために』世界思想社

服部裕幸『言語哲学入門』勁草書房

第1回講義 (20120420)

§1 復習：問答の観点から哲学的意味について明らかになったこと

2010年第一学期は、まず初めに従来の意味論（真理条件意味論と主張可能性意味論）の概観をおこなった。次にコリングウッド・テーゼ（CT）の証明を行った。

CT「(質問以外の)すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」

この証明を、言明における焦点に注目した次の二つのテーゼの証明によって行った。

テーゼ1「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」

テーゼ2「焦点の位置は、質問と答えの関係によって決定される」

最後に、「問答の同一指示テーゼ」の証明を試みた（これはCTと独立である）。

「問いは答えを求めており、何を答えとして求めているのかを明示しているはずである。そして、答えはその問い求められているものを提供する。したがって、問い求められているものと答えは、同一でなければならない。」

2011年第一学期の前半では、CTを、推論に注目した次の二つのテーゼの証明によって行おうと試みた。

テーゼa「(質問以外の)すべての言明は、何らかの推論の結論としてのみ意味を持ちうる」

テーゼb「すべての推論の結論は、問いに対する答えとしてのみ成立する」

後半では、CTと「問答の同一指示テーゼ」から次のテーゼが帰結することを証明した。

同一性言明のテーゼ「(質問以外の)すべての言明は、本来同一性言明である」

2012年第一学期のこの講義ですべきことは、「同一性言明」の意味論を考えることである。それが与えられたならば、同一性言明のテーゼに基づいて、それによって全ての言明の意味論を与えることができるだろう。

しかしその前に、以前から常に質問され、先延ばしにしてきた問題を考えておきたい。それは、「質問の意味は何か」という問いである。CT「(質問以外の)すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」が正しいとしても、これだけでは言明の意味を確定するには不十分であり、質問の意味を説明する必要があるだろう。(以下では、おそらく十分に答えることはできないだろうが、問題点だけでも洗い出しておきたい。)

§ 2 質問の意味は何か

多くの場合、私たちが質問するのは、何か困った事態に出会ったときである。それは事実認識と意図が矛盾する場合である。したがって、質問を理解するためには、質問がどのような事実認識と意図の矛盾から生じているかを理解する必要がある。これは十分条件ではないかもしれないが、必要条件である。なぜなら、質問はこの矛盾の解決を求めているので、解決すべき矛盾を理解しなければ、質問が何を求めているのかを理解できないからである。

例を挙げて考えてみよう。

「南海大地震が来たら私はどうしたらよいのだろうか」

この問いは極めて曖昧である。

「南海大地震が来たら、私は教員として教室にいるとき、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、私は家にいるとき、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、私は消防団員として、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、私はジャーナリストとして、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、私はネバダに住むものとして、どうしたらよいのだろうか」

上記の文の変化している部分に応じて、「私」の意図は異なる。

「南海大地震が来たら、海辺に住む私は、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、高層住宅に住む私は、どうしたらよいのだろうか」

「南海大地震が来たら、原発近くに住む私は、どうしたらよいのだろうか」

上記の文の変化している部分に応じて、「私」の現実認識は異なる。

因みに、質問以外の言明もまた、このような陰伏的な条件ないしデフォルトな条件を持つだろう。そして、それを考慮しなければ、言明の意味を理解することはできない。CTによるならば、そのような条件を理解することは、その言明がどのような問いに対する答えであるかを理解することによって得られることになる。しかしそれらの陰伏的な条件のすべてが問いとの関係において理解され、明示化されるのではない。なぜなら、問いもまた陰伏的な条件を持つからである。

問いの理解の曖昧な部分、つまり問いがもつ陰伏的な条件は、次のようなものである。問いは、事実認識と意図の矛盾から生じる。事実認識は主張型の言明によって明示化され、意図は意図表明型の発話（主張型以外の発話内行為をもつ発話）によって明示化される。したがって、問いがもつ陰伏的な条件は、問いを構成する理論命題と意図表明命題がもつ陰伏的な条件からなる。これらの命題の理解の陰伏的条件は、それが答えとなる問いとの関係において明示化される。このプロセスは無限に反復可能である。したがって、質問にせよ、その他の言明にせよ、多くの場合、言明の意味の完全な明示化は不可能である。

(言明の意味を完全に明示化できる場合は、存在しないのだろうか?)

■テーゼQ「問いもまた別の問いの答えである」
たとえば、次のような理論的な問いを考えよう。

「5 + 7は、いくつですか？」
「ゴールドバッハの予想は正しいのか？」
「あの星は、金星ですか？」
「冥王星は、惑星なのか？」

このような理論的な問いの意味を理解するときに、この問いを構成する矛盾を理解する必要があるだろうか。このような理論的な問いを構成する矛盾を、私は次のように考えてきた。

「5 + 7がいくつになるのかを知らない」という現実認識

「5 + 7がいくつになるのかを知りたい」という意図

しかし果たして、このような矛盾から理論的な問いが生じるといえるだろうか。

ここには、次の反論が予想される。確かに、「5 + 7がいくつになるのかを知りたい」と意図することと、「5 + 7はいくつですか」と他者に質問することは別の事柄である。しかし「5 + 7がいくつになるのかを知りたい」と意図することと、「5 + 7はいくつだろうか？」と自問することは、同じ事態の異なる表現に過ぎないように思われる。

では、この意図はどのようにして生じるのだろうか。この意図は、おそらく別の問いに答えるために、つぎのような推論によって生じる。

前提1 私はAを知りたい。(=?A)

前提2 私がAを知るためには、私はBを知る必要がある。

結論 私はBを知りたい。(=?B)

これは、通常の推論ではないが、妥当な推論であるように思われる。この推論は、「実践的推論」の一種である。もし理論的な問いが、このような推論の結論として生じるのであれば、その理論的な問いを理解するためには、それがどのような推論の結論であるのかを知る必要があるだろう。この場合には、理論的な問いは、現実認識(前提2)と意図(前提1)から生じると言える。しかし、この二つ、つまり現実認識と意図は矛盾していないように見える。

ところで、実践的な問いの場合には、次の例で分かるように、現実認識と意図の矛盾から生じていると考えられる。

「南海大地震が起きたら、私はどうするべきか？」

この問いが、例えば次のような矛盾から生じているとしよう。

「南海大地震が起きたら、様々な危険が発生する」という現実認識

「私は、私と学生の生命の危険を避けたい」という意図

ただし、この問いは、次の推論の結論として生じているということもできる。

前提1 私は、私と学生の生命の危険を避けたい(意図)

前提2 南海大地震が起きたら、様々な危険が発生する(現実認識)

結論 私は「南海大地震が起きたら、私はどうするべきか？」を知りたい(意図)

この推論もまた、実践的推論である。ここでも、現実認識(前提2)と意図(前提1)から、実践的な問いが生じているが、この場合にはこの二つは矛盾していると言える。もちろん、この場合の「矛盾」はいわゆる論理的な矛盾ではない。私は、「問いは、現実認識と意図の矛盾から生じる」とこれまで主張してきた。この主張が維持できるかどうかについては、詳細な検討が必要である。しかし、少なくとも次のことが言える。実践的な問いも理論的な問いも、現実認識と意図を前提とする実践的推論の結論として生じている。

■検討すべき仮説1 「質問は、それが答えとなる別の質問への関係においてのみ意味を持つ」

もし次の二つのテーゼが正しいとすると、そこからこの仮説が帰結する。

テーゼQ 「問いもまた別の問いの答えである」

テーゼb 「すべての推論の結論は、問いに対する答えとしてのみ成立する」

■検討すべき仮説2「問いもまた、同一性言明である」

もし問答の同一指示テーゼと仮説1を認めると、そこから仮説2が帰結する。これが仮に正しい主張だとすると、これはどういう意味になるのだろうか。